

N響JAZZ at 芸劇

指揮:ジョン・アクセルロッド

真夏の夜、交響楽団は ジャズ・バンドに変身する

今年で3回目となる「N響JAZZ at 芸劇」。

今年はさらに世界を広げて、ジャズとラテン音楽、
ミュージカルなどが、様々なスタイルで出会う作品を紹介する。



ジョン・アクセルロッド

「夏だ! JAZZだ! N響だ!」

豊島区出身のミュージシャン山下達郎が1980年代に使っていたキャッチフレーズは「夏だ! 海だ! 達郎だ!」だったが、それにならって、東京芸術劇場で真夏に開催されるNHK交響楽団によるコンサートは「夏だ! JAZZだ! N響だ!」と呼んでも構わないだろう。今年で3回目となるが、前2回は人気・注目度も高く、売り切れ必至の公演だ。N響がシンフォニック・ジャズを演奏するという意外性だけでなく、取り上げられた作品もガーシュウィン、バーンスタイン、エリントンなどの名曲ばかり。20世紀に入ってからクラシックとジャズの親密な関係を、気鋭の指揮のジョン・アクセルロッドとN響が演奏で証明してくれた。

ラテン音楽のテイストも

さて、3回目の2017年はさらに探索する領域が広がる。ロシアからラテン音楽の世界まで、そしてバーンスタインの傑作ミュージカルの中でもジャズとラテン音楽の融合を探る。

まず、ロシアの作曲家ショスタコーヴィチ。重厚な交響曲の作曲家として知られるショスタコーヴィチだが、一時期は映画音楽をたくさん手がけ、軽音楽やジャズにも詳しくあった。ユーマンズの名作《二人でお茶を》をオーケストラ用に編曲した《タヒチ・トロット》ではグロッケンシュピールなどを使い、可憐な音楽に仕立て直している。《ジャズ組曲第1番》はワルツ、ポルカ、フォックストロット(ブルース)の3曲からなり、数種のサクソ、パンジョー、様々な打楽器に加え、ピアノ、ヴァイオリン、コントラバスが各1という20世紀初期のジャズ・バンド的な編成となっている。

続いて、ジャズ・ピアノの巨匠のひとりチック・コリアの作品《ラ・フィエスタ(La Fiesta)》。イタリア系とスペイン系の血をひくチックは、1972年に彼の最初のグループである「リターン・トゥ・フォーエヴァー」のアルバムの中に、ラテン・テイスト濃厚なこの曲を収録。同時期にジャズ・ヴィブラフォンの鬼オゲイリー・パートンとチックはジャズ・フェスなどで共演し、アルバムも制作していた。2008年、ふたりはシドニー交響楽団と共演して《ラ・フィエスタ》をピアノ、ヴィブラフォン、オーケストラによるバージョンでライブ録音した。今回は日本を代表するジャズ・ピアニストで、ラテン音楽に強い塩谷哲が、そのライブ録音バージョンをピアノとオーケストラで再現する。ヴィブラフォンのパートもピアノで演奏する編曲版は、この名曲の新しい魅力を教えてくれるに違いない。

ミュージカルと出会うジャズ

アメリカを代表する指揮者レナード・バーンスタイン。作曲家としても活躍した彼の作品は「N響JAZZ」の第1回でも数多く紹介された。今回はバーンスタインの代表的なミュージカル2作品からの2曲を演奏する。まず1944年の『オン・ザ・タウン』から《3つのダンス・エピソード》。ニューヨークを舞台にしたこのミュージカルの中の重要なダンス・ナンバーを集めた管弦楽曲で、当時のスウィング・ジャズの響きが感じられる。そして名作『ウエストサイド物語』より《シンフォニック・ダンス》。これはミュージカルの成功後に、ミュージカルの主要な音楽を管弦楽用に編曲した作品。《マンボ》《チャチャ》といったラテン音楽も登場するが、それはミュージカルの中にプエルトリコ系のグループ「シャークス」が登場するから。クラシック音楽の語法とジャズ、ラテン音楽を巧みに取り入れたバーンスタインの天才的な作曲術がたっぷり味わえる作品だ。

さあ、今年も真夏の夜をN響と一緒に過ごそう。

文:片桐卓也(音楽ライター)

塩谷哲(ピアノ)

クラシックや現代音楽、コンテンポラリー・ジャズ、ラテン音楽、そしてポップスの世界と、あらゆる分野に顔を出しては彷徨っている私にとって、今回のコンサートのお話ほど嬉しく光栄なことはありません。異文化を知り、謙虚に学ぶことで新たな文化を生むことができると信じてやってきた私ですが、ショスタコーヴィチとチック・コリアという2人の天才が生み出した音楽をどう表現できるか、ちょっと武者震い……です。

N響は言わずと知れた最高峰のオーケストラ。ジョン氏とも初顔合わせなので一体どんな音楽の世界を作っていくのか楽しみでなりません。このドキドキ、ワクワクを皆さんと一緒に味わってみませんか? 是非お待ちしております。



8月19日(土) 17:00開演 コンサートホール 詳細はP12へ

指揮:ジョン・アクセルロッド ピアノ:塩谷哲* 管弦楽:NHK交響楽団
ショスタコーヴィチ/二人でお茶を(タヒチ・トロット) Op.16、ジャズ組曲 第1番*
チック・コリア/ラ・フィエスタ*
バーンスタイン/『オン・ザ・タウン』より「3つのダンス・エピソード」
『ウエストサイド物語』より「シンフォニック・ダンス」
料金:SS席7,000円 S席6,200円 A席5,400円 B席4,600円
C席3,800円 D席3,000円

クラシカル・プレイヤーズ東京 演奏会 最終公演

指揮:有田正広

最終公演に “火花”散る演奏を!

作曲当時の新鮮な喜びを、
当時のスタイルの楽器と演奏法とで伝えてきた
クラシカル・プレイヤーズ東京。
その最後の演奏会がいよいよ、今秋10月に迫る。

最後はモーツァルトで締めくくりたい

オーケストラの掉尾を飾るプログラムには、モーツァルトの最後の作品群を並べた。指揮者・有田正広はこう話す。「最終公演ということで、そこに作曲家の最晩年の作品をあてました。第39番と第41番は、モーツァルトの最後の交響曲3部作のうち2つ。第41番はクラシカル・プレイヤーズ東京(以下、CPT)の前身、東京パッサ・モーツァルトオーケストラの旗揚げ公演で披露した曲です。スタートがこの作品だったので、終わりのこの交響曲にしたい、と思いました。前回までベートーヴェンの交響曲シリーズを続けていました。今回、最終公演でベートーヴェンに代えてモーツァルトを取り上げたのは、僕自身モーツァルトがすごく好きで、今でもインスパイアされ続けているから。最終公演はモーツァルトで締めくくりたかった」

前半の《ピアノ協奏曲第27番》は、有田から独奏の仲道郁代に提案した。「最終公演の決まる前は仲道さんと、第23番まで共演していたので、次は24・25・26番かなと思っていました。第27番は念頭になかったんです。仲道さんと次の相談をするタイミングで最終公演が決まりました。そこで僕のほうから、モーツァルト最後のピアノ協奏曲を提案しました」

なによりもまず音楽家であることを目指して

そもそも、今回をもってオーケストラの歴史に幕を閉じるのは、いったいなぜなのか。「あるとき、これ以上、僕が指揮者をする必要はないのではないかな、と思ったんです」有田は続ける。「僕は自分がフルーティストであるとか、指揮者であるとか意識したことはあまりなかった。音楽家でありたいとはつねに思っていますが、かつての独裁的な指揮者の時代は終わり、求められる像はずいぶん変わりました。それでもなお、みなを強力にまとめるカリスマ性が必要な場面があります。僕はそういう音楽家ではない、とふと思ったんです。提案型ですから。CPTではたくさんの方々の貴重な体験をさせてもらえた。もうそろそろ指揮はお休みしてもいいかな、という気持ちになりました」

音楽家の感性が舞台上で“火花”を散らす

仲道との共演も回数を重ねたが、CPTの舞台とともに立つのはこれが最後だ。共演のきっかけはこうだった。「あるテレビ番組で仲道さんが、ショパンを訪ねる旅をしていました。その姿を見て、彼女の意欲と好奇心にひかれ



有田正広

ました。番組の最後、ショパンゆかりのピアノを仲道さんが弾く。みるみるうちに顔つきが変わり、エモーショナルな演奏になった。この人にショパンの使っていた楽器を、もっと知ってもらいたいなと思ったんです」そこから、当時のブレイエル・ピアノでショパンを、18世紀のシュタインを写したピアノでモーツァルトを弾く演奏会が、次々と実現していった。10月の公演はその集大成となる。

「準備して何度も向き合ってきた音楽だけど、本番のその瞬間に散る火花こそ、大切なもの。それしかないです」舞台上上がる音楽家の気持ちを、有田はこう表現する。「譜面を開いてそのとき感じたもの、それが昨日のリハーサル、一昨日の練習と違ってよい。よく言うでしょ、演奏は水物だって。これまでの経験やさまざまな研究はもう、血肉になっています。音楽家としての素っ裸な感性で感激できるかがすべてです」

取材・文:澤谷夏樹(音楽評論家)

仲道郁代(フォルテピアノ)

有田正広さんとCPTとの公演の数々は、私に作曲家とその時代に向き合うことの大切さを教えてくれました。モーツァルト、ベートーヴェン、ショパン……それぞれの時代に実際に鳴っていたであろう音が身体に染み込み、その音、その楽器を思いながら楽譜を読む。もたらされたのは、新しい発見でした。作曲家たちの生きた言葉、音楽を見つける道筋が示される。決して古い遺跡を訪ねる作業ではありません。「古きを温(たず)ねて新しきを知る」とは正にこのことでした。

東京芸術劇場では、日本はおろか、世界でも滅多に聴けない当時の音世界が再現されました。なんと貴重な一期一会の体験だったのでしょ。今度が最後となること……残念でなりません。最後の公演を深く刻むべく、心を引き締めています。



©Kiyotaka Saito

10月13日(金) 19:00開演 コンサートホール 詳細はHPへ

指揮:有田正広 フォルテピアノ:仲道郁代
管弦楽:クラシカル・プレイヤーズ東京
モーツァルト/交響曲第39番 変ホ長調 K.543
ピアノ協奏曲第27番 変ロ長調 K.595
交響曲第41番 ハ長調 K.551「ジュピター」
料金:S席4,000円 A席3,000円 B席2,000円